

熊取町埋蔵文化財調査報告第9集

東円寺跡発掘調査概要・V

—東円寺跡88年—5区の調査—

1989年 3月

熊取町教育委員会

は し が き

東円寺跡は住吉川・大井出川の右岸の段丘上に位置し、その遺跡の範囲は熊取町役場を中心に東西約900m、南北400mの広がりをもちます。

昭和52年に大阪府文化財分布図にその範囲が掲載されてからは、数次の発掘調査が実施され、着々とその実像が明らかにされつつあります。

今回の調査では中世の建物跡を検出し、中世の村落について窺い知る機会を得ました。

今後さらに東円寺跡での調査が推捗するに伴い、村落の規模やようすなどを明らかにしていけるものと思います。

なお現地での調査及び本書の作成にあたってご尽力、ご協力をいただきました方々、並びに関係者各位に対し、深く感謝の意を表します。また、今後の調査にご協力、ご指導を賜りますようお願い申し上げます。

平成元年3月

熊取町教育委員会

教育長 山中長正

例 言

1. 本書は、熊取町教育委員会が、昭和63年度に実施した東円寺跡の調査概要報告書である。
2. 調査は、熊取町教育委員会発掘調査囑託員井田匡を担当者として、昭和63年9月1日に着手し、昭和63年9月26日終了した。
3. 調査に要した費用は、近畿配管株式会社の負担によるものである。
4. 調査の実施と整理にあたっては、久世公一、富村伊都子、高垣香織・辻本栄子の諸氏の参加を得た。また、近畿配管株式会社・西松建設株式会社・竹口文化財土木工業所並びに関係各位より多大な協力を得た。明記して感謝の意を表したい。
4. 本書中の標高は、東京湾平均海水面を基準とし、方位は、地図以外は磁北を示すものとした。
5. 本書の執筆及び編集は、井田がおこなった。
6. 調査にあたっては、写真・実測図等の記録を作成するとともにカラースライドを作成した。広く利用されることを望む。

目 次

第 1 章	沿 革	
第 1 節	調査に至る経過	1
第 2 節	遺構の呼称について	2
第 2 章	調査の成果	
第 1 節	遺跡の概要	2
第 2 節	検出遺構	2
第 3 節	包含層の出土遺物	6
第 4 節	遺構の出土遺物	7
第 5 節	出土瓦	8
第 6 節	ま と め	9

図 版 目 次

図版第一	調査区全景
図版第二	調査区全景 周辺小字名図
図版第三	出土遺物

挿 図 目 次

第 1 図	熊取町の位置	1
第 2 図	調査地位置図	1
第 3 図	調査区地区割り図	2
第 4 図	調査区平面図	3
第 5 図	A 調査区・B 調査区平面図	4
第 6 図	包含層の出土遺物	5
第 7 図	SK 1 出土遺物	6
第 8 図	Pit 1・Pit 6 出土遺物	6
第 9 図	Pit 2 7 出土砥石	6
第 10 図	Pit 及び SK - 1 出土遺物	7
第 11 図	Pit 1 0 7 出土唐草文軒平瓦残欠	8
第 12 図	東円寺跡 8 8 年 - 5 区出土瓦	9

東円寺跡発掘調査概要・Ⅴ

第1章 沿 革

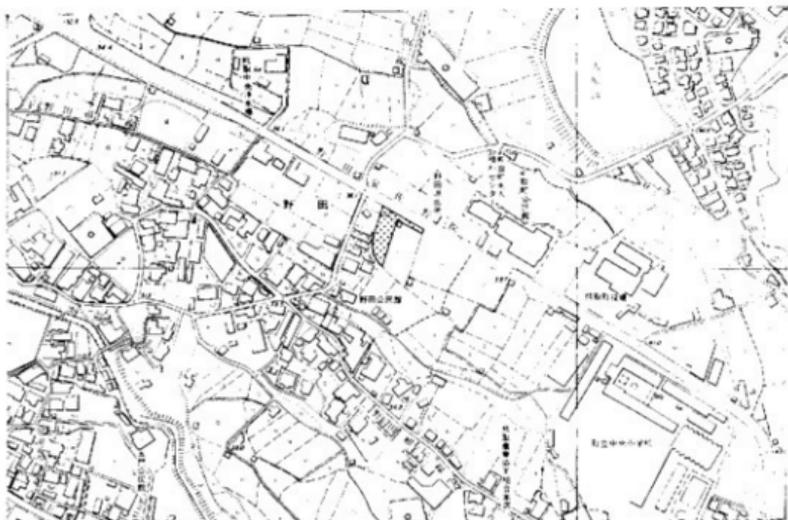
第1節 調査に至る経過

熊取町大字野田2326番地において、近畿配管株式会社が事務所の建築を計画し、昭和63年9月19日付で文化庁へ土木工事に伴う埋蔵文化財の発掘届出書を提出し、熊取町教育委員会には埋蔵文化財包蔵地の存在確認調査に伴う技師派遣依頼が提出された。

これを受けて熊取町教育委員会では同年9月27日に、人力掘削により試掘調査を実施し、遺構及び遺物包含層を確認した。これに基づいて遺跡の取り扱いについて、熊取町教育委員会と近畿



第1図 熊取町の位置



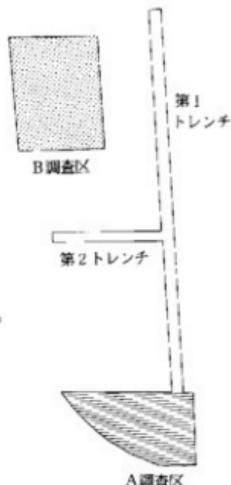
第2図 調査地位置図

配管株式会社の双方で協議を重ねて行ない、遺跡の重要性に鑑み調査を実施することで合意した。

調査は建物の基礎及び浄化槽により、破壊される恐れのある箇所を中心に約250㎡の調査を実施した。

第2節 遺構の呼称について

調査を実施する際に遺構については、検出した順に遺構の略称と番号を組み合わせて呼称することとした。略称は溝をSD、柱穴をPit、建物跡をSB、土壌・焼土壌をSKと呼称したが、本書中でもこれに準じてSD-1、SD-2と呼称することとする。



第3図 調査区
地区区割り図

第2章 調査の成果

第1節 遺跡の概要

調査を実施した地点は、小字名では廣畑・家ノ上金目と呼ばれる地点であり、東円寺の推定寺域より150m程西南に離れた所に位置する。現状は水田で、地表面のレベルは隣接する東側の東円寺跡87年-5区より、約50cm程低い。

検出した遺構としては、溝が2条、土壌を2基、建物跡を1基、柱穴を約80基検出した。遺物は総体的にみて少ない量であったが、主に11世紀から14世紀までのもので、遺構に伴う遺物が多かった。以下遺構及び遺物について述べることにする。

第2節 検出遺構

① SB-1

SB-1はB調査区で検出した。規模は梁間2間、桁行2間で柱間は梁間が桁行共に2.1m前後を測る。遺物はPit 107より唐草文軒平瓦が出土している。

② SD-1

SD-1は調査区Aの南端で検出した溝で東から西へ流れる巾2m前後、深さ約40cmの溝である。遺構覆土は紫灰色粘質土で、出土遺物としては、瓦器・東播系こねばちの破片が出土した。

③ SD-2

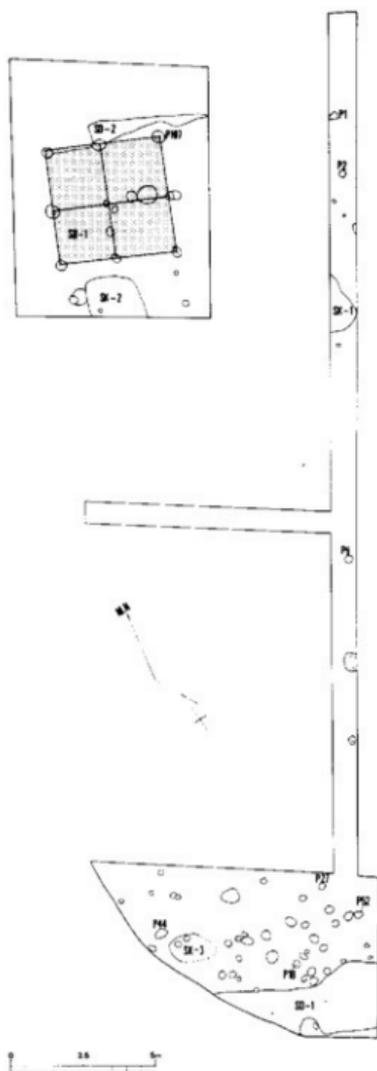
SD-2はB調査区で検出した巾80cm、深さ約15cmの溝である。遺構覆土は茶灰色粘砂土で、遺物は出土しなかった。SB-1共に並行して存在することからSB-1の集雨溝であると考えられる。

④ SK-1

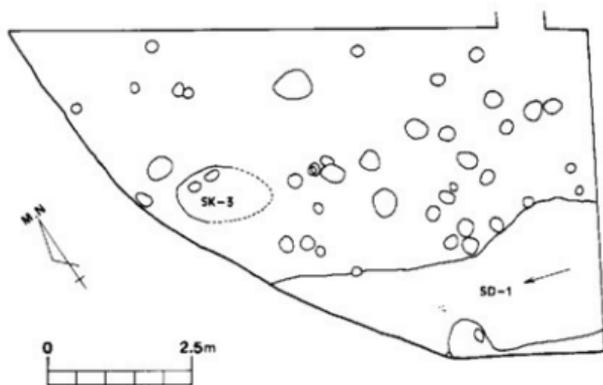
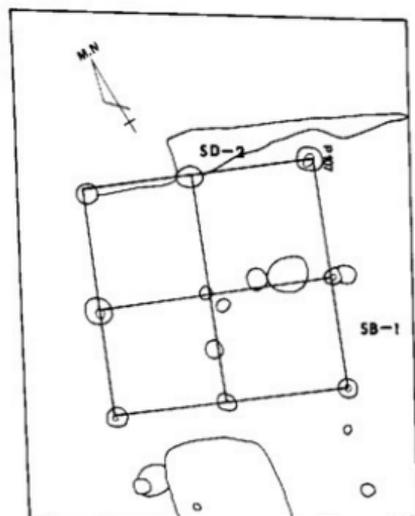
SK-1は第1トレンチで検出した土壌で、短軸1.2m以上、長軸1.8m以上、深さ約20cmを測る。遺構覆土は紫灰色粘質土で、出土遺物としては、瓦質のこね鉢・瓦器塊などが出土した。

⑤ SK-2

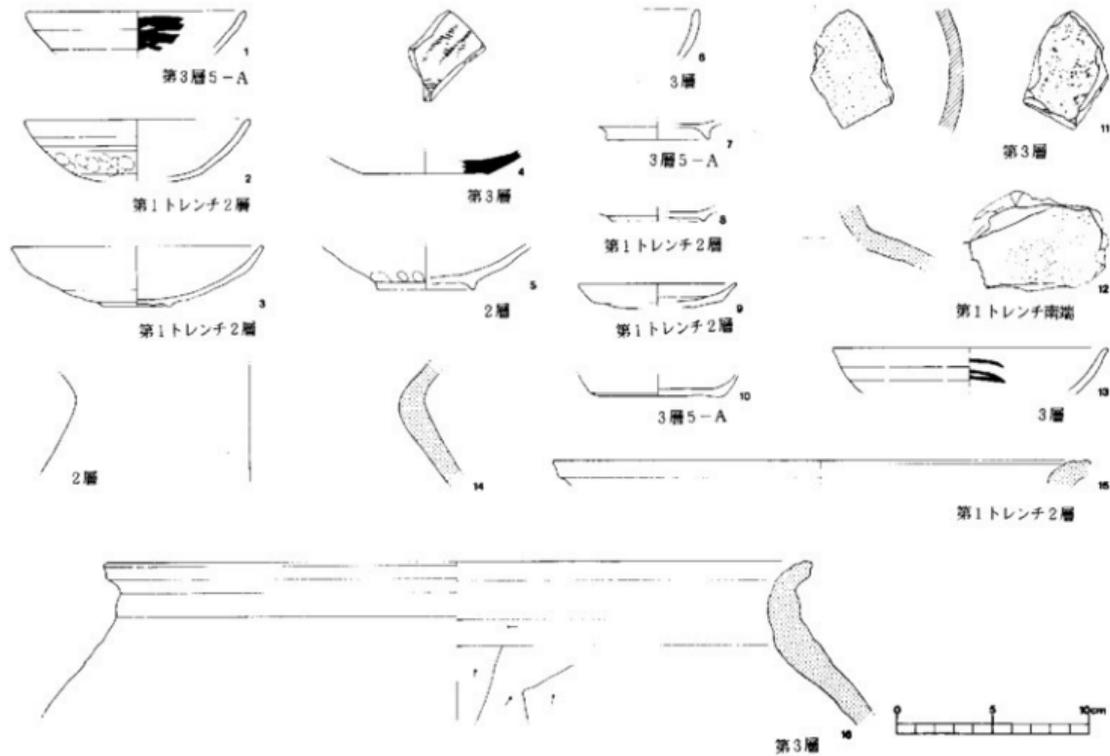
SK-2はB調査区の南端で検出した土壌で、短軸1.8m、長軸1.3m以上、深さ約10cmを測る。遺物は出土しなかった。



第4図 調査区平面図



第 5 図 A 調査区・B 調査区平面図



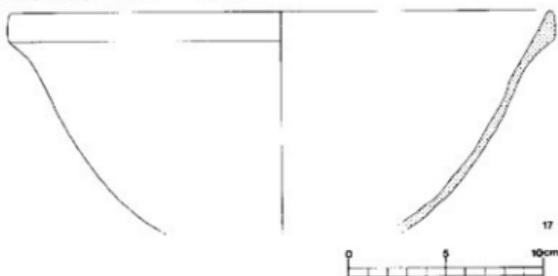
第6図 包含層の出土遺物

⑥ 柱穴

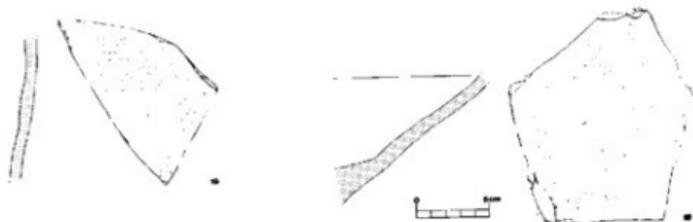
柱穴は大小あわせて約80基の柱穴が検出されたがそのいずれもが地山に直接削りこまれており、柱穴の中には根石や瓦があるものが一部みられた。

第3節 包含層の出土遺物（第6図1～16）

1・2・3・5・
6・7・8・13は
瓦器碗の破片である。
いずれの瓦器碗も1
3世紀後半の時期が
与えられそうである。
9・10は土師器の

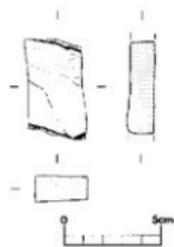


第7図 SK-1出土遺物

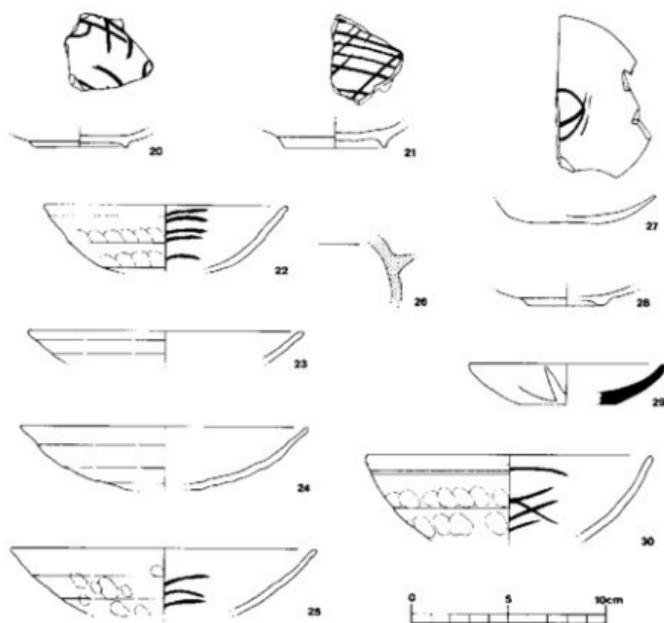


第8図 Pit 1・Pit 6出土遺物

小皿であるがやや焼けがあまい。11は須恵器の
甕の破片で体部のもと思われる。外面に多方向
の刷毛目が施され、内面にはたたきめが施されて
いる。強く焼きしめられたものである。12・1
4は瓦質の甕の頸部と思われる。12は外面に多
方向への刷毛目がみうけられる。15は須恵質の
甕の口縁部である。16は瓦質の甕の口縁部であ
る。外側には刷毛目を施し、内面には多方向への
指ナデが施す。



第9図 Pit 27出土磁石



第10図 Pit及びSK-1出土遺物

第4節 遺構の出土遺物

① SK-1 (第7図17・第10図21・24・25・27・28)

17は瓦質の鉢でやや薄手のものである。21・24・25・27・28はすべて瓦器碗である。21は内面に斜格子暗文がみうけられる。27は螺旋状の暗文がみうけられる。

② Pit 1 (第8図18) Pit 6 (第8図19)

18と19は同一個体とみられる須恵質の壺の破片である。18は外面には若干の自然軸がみられる。19は外面が全体的に自然軸がかかっており、たたきめを施してある。

③ その他のPitの遺物 (第7図20・22・23・26・29・30)

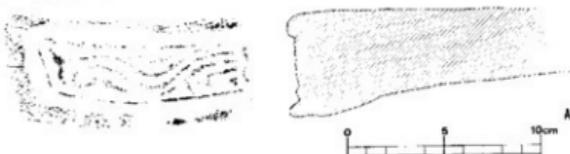
26はPit 18で出土した羽釜の羽根部の破片である。22はPit 27

で出土した瓦器塚で内面には螺旋状の暗文がみうけられる。30はPit 52で出土した瓦器塚でやや厚手のものである。20・29はPit 107で出土した遺物で、20が瓦器塚で、高台の断面は台形を呈す。29は青磁の破片である。底部は施軸されていない。30はPit 27より出土した砥石である。火をうけているらしい煤が付着し、灰橙色を呈す。

第5節 出土瓦

① Pit 107出土の唐草文軒平瓦(第11図A)

AはPit 107の遺構埋土より出土した。Aは瓦当面がほぼ半分残存している唐草文軒平瓦であ



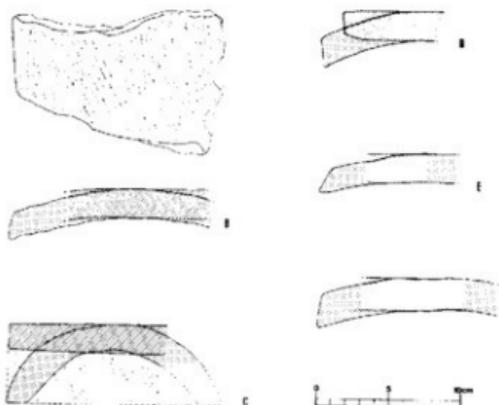
第11図 Pit 107出土唐草文軒平瓦残欠

る。瓦当はやや摩滅しているが、周縁と内区を画する圈線があり、子葉もはっきりとみえる。瓦当を継ぎ合わせた痕跡もないことから平瓦状の端部に直接范を押ししたのではないかとおもわれる。凸面には縦方向のヘラミガキが施され、凹面には横方向のナデがみうけられる。焼成は2次的な焼成をうけているらしく色調は赤橙色を呈し、胎土は良好で2mm未満の石英砂を少量含む。

② その他の瓦(第12図B~F)

Bは一辺が残存する平瓦で、SK-1より出土した。厚さは約2cmで、凹面には多方向の刷毛目が施されている。焼成は2次的な焼成をうけているらしく色調は赤橙色を呈す。胎土は良好で2mm未満の石英砂を少量含む。Cは一辺が残存する丸瓦で、包含層内より出土した。厚さは約2cmで、凹面には横方向のヘラミガキが施されている。焼成は2次的な焼成をうけているらしく色調は白橙色を呈す。胎土は良好で2mm未満の石英砂を少量含む。Dは一辺が残存する平瓦で、包含層内より出土した。厚さは約2cmで、端部をヘラケズリしてある。焼成は良好で、色調は黒灰色を呈す。胎土は良好で2mm未満の石英砂を少量含む。Eは一辺が残存する平瓦で、包含層内より出土した。厚さは約1.8cmで、凹面、凸面共にハナレズナを施す。凸面には縦方向の刷毛目が施されている。

焼成は2次的な焼成をうけているらしい。色調は灰橙色を呈し、胎土は良好で2mm未満の石英砂を少量含む。Eは一辺が残存する平瓦で、P i t 1 0 7より出土した。厚さは約2cmで、凹面、凸面共にハナレズナを施してある。焼成は2次的な焼成を受けしいるらしく色調は白灰色を呈し、胎土は良好で2mm未満の石英砂を少量含む。



第12図 東円寺跡88年-5区出土瓦

第6節 まとめ

当該地では、狭小な調査範囲でありながら、効率良く遺構を検出でき、成果をあげることができた。耕作土を除去するとその下面が地山で、遺構がすぐ検出され、その一部は削平されていた。これは水田造成を繰り返しおこなったために遺構自体も中世以降に削られたものと思われる。

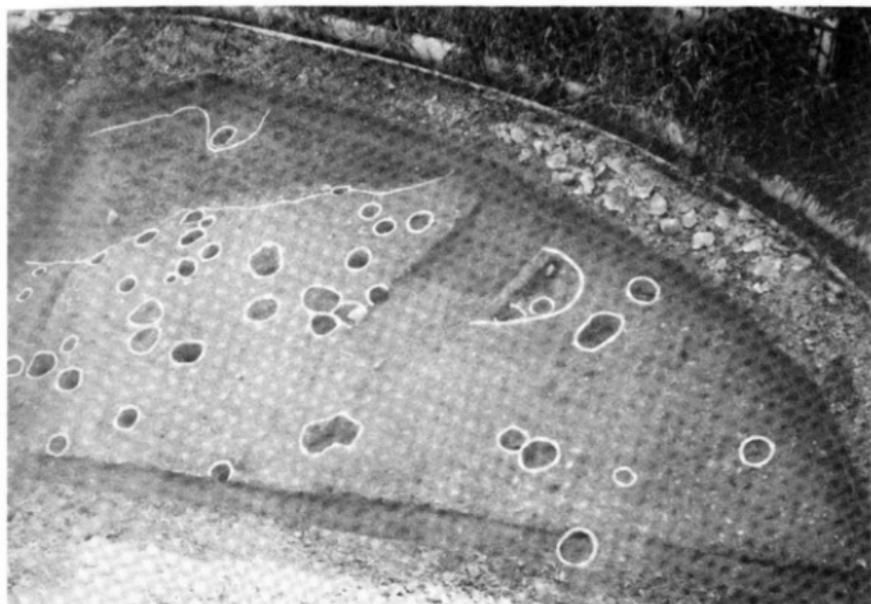
今回の調査では建物跡を構成する柱穴を検出したが、その柱穴が並んでいる方向が示す方位と現在の水田の地割りが示す方位は、違った方位を示しており建物が存在していた時期と水田を造成した時期の時期差によって、地軸に相違があることが確認できた。これら時代毎の地軸の相違を明確にすることによって、時代毎の土地利用のかたちを通して、それぞれの時代の集落の様子を窺い知ることができるとと思われる。

今後さらに周辺での調査結果の蓄積を待って、資料の比較、検討を実施し、何らかの形でその責を果たしたい。

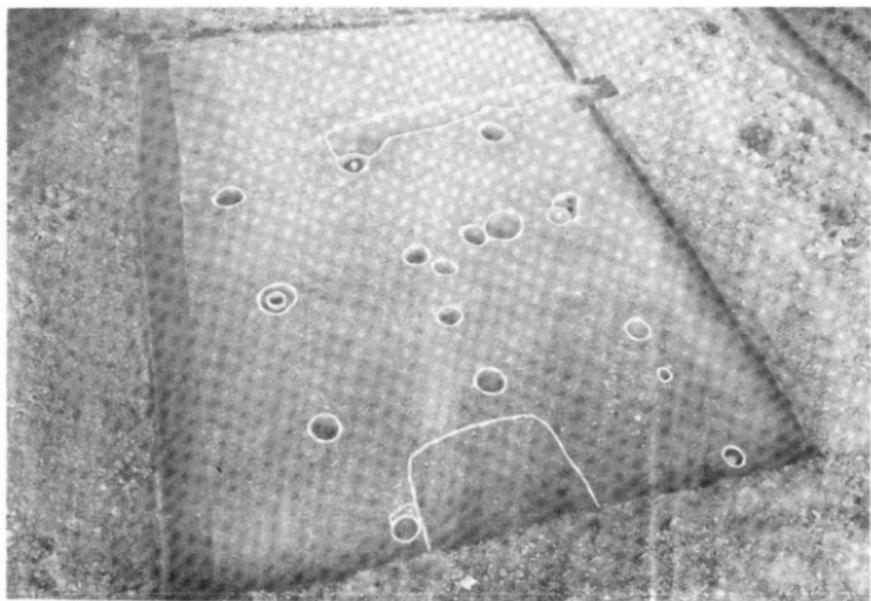
文末となったが、調査を実施していく上で数多くの方々よりご教示、ご支援いただいたことを深く感謝し、今後も東円寺跡の調査・保存・活用について十分な配慮を関係各位にお願いしておわりとしたい。

圖

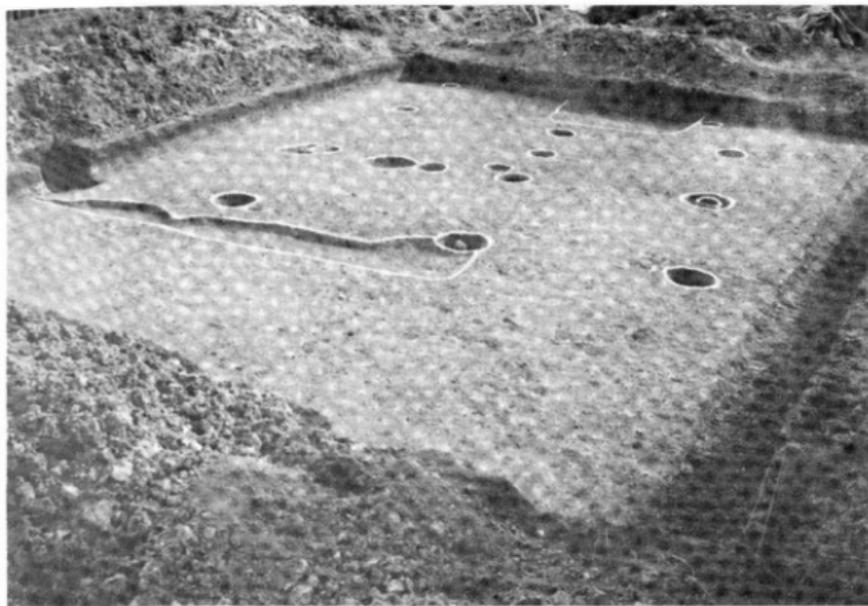
版



A調査区全景（北から）



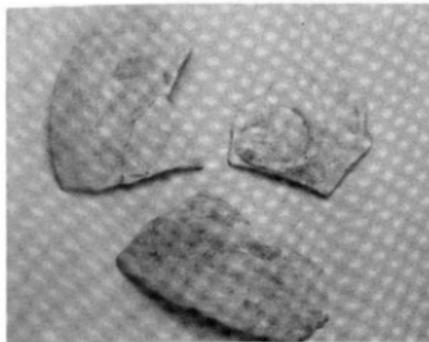
B調査区全景（南から）



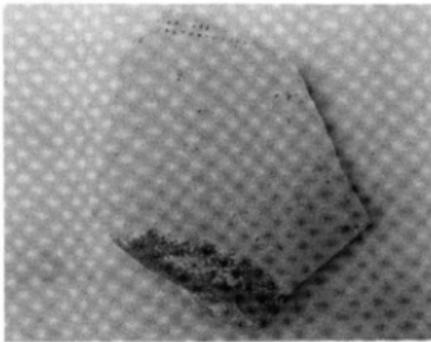
B調査区(北から)



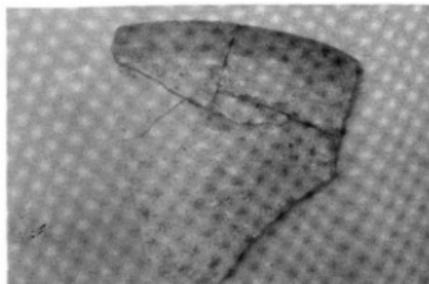
註) 熊取町遺跡群発掘調査概要報告書1より転用



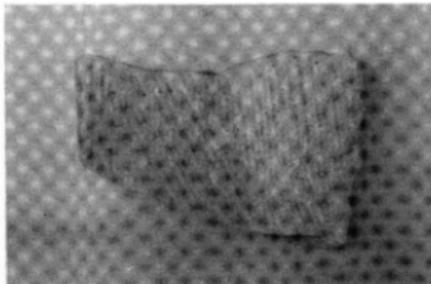
第1トレンチ出土 瓦器片



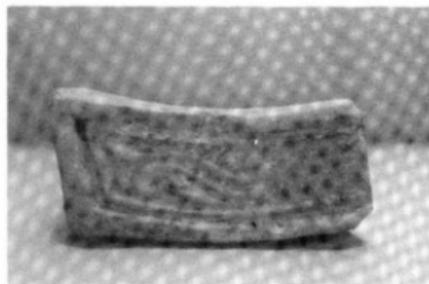
Pit6 出土 須恵質はち



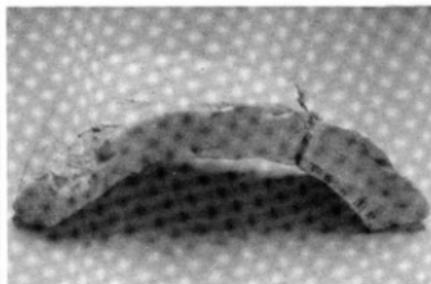
SK-1 出土 瓦質はち



SK-1 出土 平瓦



Pit107 出土 唐草文軒丸瓦(残久)



包含層内出土 丸瓦